

会津若松市幕内の民俗

倉石忠彦

会津若松市幕内の民俗

- 一 概況
- 二 信仰
- 三 結婚をめぐって
- 四 生活暦の展開

論文要旨

幕内の集落は城下町会津若松の近郊農村である。そのため日常生活においても町と密接にかかわっている。城下町の野菜場と呼ばれ、野菜栽培が盛んであったし、現在でも主要な生産物である。そしてかつては毎朝籠に野菜を入れて城下に売りに行った。明治維新後は町分の田を手に入れ、水田耕作も大いに行うようになった。現在そうした所は住宅地になり、幕内の農家もマシン・経営などをを行い、生産者としてだけではなく、経営者としての一面を持つようになつた。いずれの時代においても村の外の世界と深くかかわってきたということができる。そのために社会の動きに敏感であり、進取の性格が濃く、学問に対する関心も高かつた。そこに『会津農書』などがまとめられる基盤もあった。

村の信仰生活においては、新城寺（淨土宗）の果たす役割は大きく、また稻荷信仰も目立つ。一本木稻荷を祀り、屋敷神として稻荷を祀る家も多い。またかつては金毘羅講・古峯ヶ原講も盛んであった。そして男生の尹勢参り

仲間・女性の会津めぐり仲間は信仰だけではなく、日常生活におけるつき合いの上でも大きな役割を果たした。

新しく来た嫁はこの会律めぐりの仲間に入つて新たな村の生活を始めた。嫁の披露としては一月十二日の祭文語りの折に盛装して列席することによってもなされたが、その生活は家事だけではなく、野菜の生産と販売などにも大きくかかわった。

生活の展開は畑作物の生産が基盤になり、一年中畑の仕事があった。また十日市・エビス講など、町とのかかわりが生活の展開の大きな目安ともなっていた。

会津地方という地理的条件はもとよりその生活を大きく規制していたが、それにもまして都市近郊という条件が、幕内の生活を規制しているように思われる。